

# 教 仏 名 聞

第48号  
(発行日)

2014年9月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

# 解脱の光輪きわもなし

解脱の光輪きわもなし

光輪かぶるものはみな

有無をはなるとのべたまう

平等覚に帰命せよ

現代語訳（解脱の徳ある無辺の光を身にこうむるものはずべて、有・無の偏見を離れるとお説きになる。平等覚の仏に帰順せよ）（「親鸞和讃集」名畑応順訳）

\*

今回は、親鸞聖人の製作されましたこのご和讃（浄土和讃）をご縁にお話をさせていただきます。まず「解脱の光輪きわもなし 光輪かぶるものはみな」ということですが、ここの「解脱の光輪」のところに親鸞聖人はご自分で註釈（左訓といえます）をほどこしておられます。それには「（輪）くだく。解脱といふは、悟を開き仏になるをいふ。われらが悪業煩惱を阿弥陀の御光にて摧（くだ）くといふところなり」

とあります。

ここで悪業煩惱というのが私たちのことです。悪業は悪しき行い、煩惱は悪しき行いの元となる悪しき心のことで

たとえば、人を苦しめ、ののしるような行いを悪業といいますが、そういう行いが出て来る元には怒りや憎しみの心がありましょう。内なる怒りや腹立ちの煩惱が、行爲となって外に表れて悪口を言ったり殴ったりしますが、そういう悪しき行為のことを悪業といえます。ですから内心の煩惱が外に悪しき行いとなって表れると悪業になりますから、煩惱と悪業は離れないのです。

仏様から見られた私たちの人生生活は「煩惱悪業をくり返す生存を続けている」といわれるのです。私たちは今まで何とも思っていなかったけれども、仏様の教えを聞くことによって、自分の為してきている生活は悪業煩惱のくり

返してはなかったのかと反省せしめられます。

「ああなりたい、ああなりたくない、これが欲しい、これが欲しくない、ああなりたくない、あれが好きで、これは嫌い」など、良し悪し、損得、好き嫌いで生きている日常生活自体が煩惱の生活といえましょう。

日常の生活意識そのものに、我が身が可愛いという煩惱の心がつきまとつていきます。「健康はいいけど、病気はいやだ」「若い時は良かったが、老いた今は情けない」「損はしたくない、得がしたい」「あの人は好きだけど、彼は嫌いだ」「この人は私の利益になるか、それとも私の損になるか」などなのです。こうした生活意識の基本のところには「生きてるのはいいが死ぬのはいやだ」という、いわゆる「生を愛し、死を憎む」煩惱が人生生活の根っこにあります。

そうして困ったことには、こうした悪業煩惱は私たちの理性や知性や意思によって、取り除いたり、それらを浄化

したりすることができないのですね。自己浄化が自分でできないということ、阿弥陀様は私に先立つて知りつくし、私たちに教えて下さるのであります。

私たちは自分の人生生活が悪業煩惱の生活であることを知らず、それを何とか取り除いて浄化したいと思わず、たとえそれを取り除きたいと思っても取り除くことができないということ、それも知らないのです。そういう愚かな凡夫が私たちなのですね。

暗い縁の下にうごめいているダンゴ虫は、自分がダンゴ虫であることも知らず、ダンゴ虫でないもつとましな物になりたいとも思わず、またもつとましな身になりたいと思ってもなることができません。真つ暗な縁の下にいつまでもうごめいている、そういうダンゴ虫のような私たちです。

このような私たちを仏にしてやりたいと願い、私たちに代わって修行して、私たちが仏にする功德を成就して下さいのが阿弥陀仏（南無阿弥陀仏）です。まことに不可思

議というほかはありません。

聖人は『唯信鈔文意』に

「如来の御ちかいを、ふたごころなく信樂すれば、撰取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたま

うは、すなわち、りようし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなどを、よくこがねとなさしめんがごとし」

と仰せられ、阿弥陀仏のお助けは、値打ちのない石ころのような私たちを、あたかも黄金のような仏にならしめようとお助け、悪業煩惱の生活者を清浄真実の仏にして下さる不可思議な有難いお助け、であると聖人は讃えておられます。

その不思議なハタラクが、今ここの私たちにいつも離れずに関わって下さっている。そこに大きな恵みがあるので

す。弥陀の本願は「悪業重き者よ、煩惱深き者よ、汝は己の力では悪業煩惱をどうすることもできないのだ。そんなお前はただ我が名を称えるばかりでよい、我が願力一つによつて、汝の悪業煩惱をくだいてかならず仏にする」と誓つて喚びかけて下さっているの

です。その喚び声がナムアミダブツのお声なのです。

私たちはこの本願の仰せを聞いて、そのまま「ありがとう、ナムアミダブツ」といただくばかりです。

この不可思議な用きは、私たち凡夫の思いや思案では到底なるほどと納得できるようなものではありません。弥陀の本願のお助けが確かなものかどうか、私たちの思案や考えによつて確かめることはできません。そればかりか、いつかは納得できると思い、確かめようとしているかぎりいつまでもラチはあきません。そういう思案はどれほどしよう、まったく役に立たないといと捨て置いて、「阿弥陀様なればこそ、こんな私を」と不可思議な本願の仰せをそのまま聞くばかりです。

不思議といえば、世界には不思議なことはいくらもありません。この世界は不思議だらけです。地球が自転しつつ太陽の周りを回っているのも、なぜそうなっているのか、それは不思議というほかありません。ただ科学者はこうした不思議の中に、ある法則性を

見出して、そこから物と物との関係を計測し、応用して、人間生活に役立てているにすぎません。大もとの「物はなぜそうなっているのか」という理由は分かりません。不思議というほかはないですね。その他、心のあることも、目がものをみることも、母親が受胎し子供が生まれることなどなど身近なことでも、不思議な事柄はいっぱいあります。

そんな中で、阿弥陀仏の本願の不思議は、悪業煩惱だらけのものを仏にして下さる極めて有難い不可思議です。そういう不可思議な有難いほたらきが一切衆生にかけられていることを発見し、教えて下さり、私たちに「阿弥陀仏は私たちとともにまします。その阿弥陀仏の救い（恵み）をいただて生きなさい。そのままなりで助けていただきなさい」とお勧め下さるのが釈尊であります。それを私たちは善知識からお聞かせいただくのです。

不思議な弥陀の誓願（お助け）を聞いて、納得できたことが信心ではありません。また納得できないからといって

弥陀の救いからもれるのでもありません。

「納得できるか、どうか」に力を入れると、いつまでも「分かりません」がついて回ります。仏法聴聞という、何か仏法を聞いて納得し分かることであると思いがちですが、納得できたことが信心ではありません。「聞いてもなかなか分かりません」とよく言われますが、それは、聴聞していけばいつかは分かる、いつかは納得できると、思っているからではないでしょうか。

仏法を聴聞する限りは聞いて分かるうとするのは自然ですが、「聞いて分からなければ」とか「聞いて分かってくれば」とするのにはハカライです。いわゆるお助けをつかもうとするのです。

弥陀の不可思議な誓願、すなわち「汝をまるまる引き受ける、ただ称えるだけでよい」とのお助けを聞いて、その理由や訳はともあれ「なんとまあ有難いことよ」と、阿弥陀仏の誓いを、理屈や訳を云々することはおいて、ストレートに「聞く」のであります。「ああ、不思議なお助け、有難い」と聞くとともに、そ

れこそ不思議にも阿弥陀仏の大悲心が私の心の底に流れ込んで下さいます。大悲の光（言葉）をそのまま浴びるのです。阿弥陀仏の光は無碍光ですから、私たちの心の煩惱やさわりはいかほど深く重くても、それによつてさまたげられず、光は私の心に届いて下さいます。

「われらが悪業煩惱を阿弥陀の御光にて摧（くだ）く」阿弥陀仏の光は、こうした私たちの悪業煩惱をくだいて、ついにはおなじ仏にして下さる、とお聞かせ下さいます。そういう阿弥陀仏のお徳を「解脱の光輪」といわれるのであります。

こういう量（はか）りなき解脱（さと）りの功德である阿弥陀仏の光に照らされ、身にいただいた人は「光触かぶるものはみな有無をはなるとのべたまう」といわれるのです。

「有無をはな（離）る」の（有無）とはどういう意味かと申しますと、それは、（有るとか無いとか）という、物事を実体的に見て、それにとらわれている見解のことです。私たちは、有れば有るに

とらわれ、無ければ無いことにとらわれます。それを『無量寿経』には具体的に

「田あれば田を憂う。宅あれば宅を憂う。牛馬六畜(家畜)・奴婢・銭財・衣食・什物(家財道具)、また共にこれ

を憂う。田なければまた憂えて田あらんと欲う。宅なければまた憂えて宅あらんと欲う。牛馬六畜・奴婢・銭財・衣食・什物なければ、また憂えてこれあらんと欲う。」

などと説かれています。本当にこの通りですね。不動産が有れば有ったで、土地の管理や、土地価格の上げ下げのこ

とや、税金対策や遺産相続などで煩ったり不安になったり争ったりするし、逆に不動産の一つもなければ、欲しいの

ここで「有無」といわれるのでしよう。

この場合の「有無」について、もう少し申しますと、私たちが「死んだ後にどうなるか」という問題に関して、古

来「有無の邪見」があるとうまく言われるのです。それはどういうことかという

と、「死んだら私の霊魂が残っていく」というような実体的に存在するという考え、これが有の見、逆に「死んだら無になって何も残らない、死んだらおしまい」というよ

うな考え、これが無の見です。私たちはそのどちらかになりがちです。けれども、どちらも邪見であって、マチガツタ

考えですよというのが仏法なのです。死んだら霊魂というふうな目には見えない「何物か」が残り、それが墓の下に入ると

これが「無の見」です。こういう「有見」と「無見」はどちらも誤った見解ですよと仏法では説かれています。

私たちが凡夫はどうしてもどちらかの見方、すなわち有の見か無の見になってしまいま

す。なぜそうなるかといいますが、日頃の考えが「私」というものを実体化しているから

です。「我あり」と実体的にとらえています。私というものがここにこうして「実体として存在している」と思い

込んでいます。だから、この私が死ぬと、形を変えて霊魂のようなものとして続いているかと考えるか、あるいは死ぬ

くと、私としての実体は破壊されて何もなくなる、無になると考えるか、になるのです。そういうわけで、元にあるのは「我」という実体としての私があると思いついて誤った考え(邪見)です。

と覚知することができ、いわば有無の二見を離れるといわれています。

ここでは阿弥陀仏の光にあえば、この有無の二つの見解を離れて正しい見方(正見)が与えられると仰せられるのです。それは、阿弥陀仏の解脱の光明をいただく

と浄土に生まれて、そこで悟りが完成する。その時に悟りの智慧は有無の二見を離れて「一切は空である」と覚りきることができるといわれています。

そして阿弥陀仏の光明をいただいた人は、この世においては「一切は空である」と覚りきることとはとてもできなく

ても、阿弥陀仏の光明によってその人の心に発起した信心の智慧から「私は死んで、霊魂として迷いを重ねていくの

でもなければ、死んでなくなってしまうのでもない、私は浄土に生まれて仏にならしていただく」と、阿弥陀仏の仰せのままを有難く受けとらせていただけるのであります。

阿弥陀仏は私たち愚かな凡夫には、「一切は空であると覚れ」などと難しいことを仰せられず、「我が国(浄土)に生まれるとおもって安心してくれよ」(欲生我国)と仰

せ下さってますから、その通りに「ああ、阿弥陀様は私を浄土に生まれさせて下さる、その証拠が南無阿弥陀仏、ああ有難い」と、仰せのままを有難く思うばかりであります。こういう信心の智慧は、有無を離れた解脱の悟りの智慧と質は同じといわれています。

私たちは「一切は空である」というような悟りはこの世では開けないまま、「死して浄土に生まれさせて下さる、有難い」と思わせていただき喜ばせていただいている中に、同じ悟りの智慧が働いているといえるのです。なぜなら信心は、凡夫の迷い心ではなくて、いただいた仏様の智慧のお心だからです。

そして最後に「平等覚に帰命せよ」と結ばれています。平等覚というのは、一切の存在を平等に見る悟りの智慧を完全に成就し、それによって一切の衆生を平等に救おうと、本願を起こして一切衆生を平等に救う力を成就された阿弥陀仏のことです。そのへ

平等覚である阿弥陀仏によりかかれと、私たちにお勧めになるのであります。

(了)

# 木村無相さんの法信 24

(昭和五十八年九月九日のお便りの続きです)

そのところを紀さんは、  
(三)において、

如来の願心、大悲心が、この凡心にはなれず、凡心にはたらしき、てらしきたもうそこに廻向のことばがあると思  
います。凡心の、出離之縁なきことを、  
知らしめ、如来の誓いをたのましめる  
ハタラキとしてハタラキたもうという  
こと

と紀さんは書いて来ている。  
その通りだと思います。

それで「生死出離」のすべて、一切合切が「如来そのもの」「如来廻向」のオハタラキに依るので、ワレワレ凡夫の手を出し、足を出すところは、ツユチリほどもないのであって、ワレワレとしては、  
如来聖人の仰せのまんまに

ただ念佛せよ のお勅命のまんまに  
ナニノ文句も、リクツもなく、ココロ

のことは、さておいて、ただ口に、声に、オーム念佛、発音念佛をするばかりのこと、ワレワレの力、ハタラキとしては、ナニ一つないのである。その、勅命を勅命としていただき、勅命のまんま、  
ただ念佛申す

ということも、ワレワレのハタラキにあらずして、如来廻向のオハタラキによってただ念佛申さるのであって、

ただ念佛

オーム念佛

発音念佛

というも、「我が力」「我がハタラキ」でなく、どんな念佛にしても、「如来廻向」なくしては一ト声も称えられないのである。

『歎異抄』第六条かに

ひとえに弥陀の御もよおしにあづか

て念佛申しそろう

とあり、第十一条に

念仏の申さるるも如来のオンハカライとあるは、イワユル、「信の念佛」だけのことではない。「不信の念佛」であ

うが、「ウタガイの念佛」であろうが、「カラ念佛」であろうが、「フロ念佛」

であろうが、いかなる念佛といえども、如来廻向でない念佛は、一ト声もない

のであります。

これを知らしむるも、如来の廻向である。

そこで、どうしてそういうことになっ

ているのか。どうしてすべてを、「如来廻向」といえるのかと言えは、

それらのすべては、

如来の大慈大悲心によって、

「若不生者 不取正覚」

と「三心十念 若不生者不取正覚」

「必ず念佛の衆生をして」というより前

に

「必ず、逆謗センダイの者も、念佛の身

に

に

に

に

## 《秋季彼岸会》

九月二十二日(月)

午後二時始まり

にせしめて、浄土にて(この世にではなくて)正覚の身たらしめねば、おかぬ」とある。

念佛往生の誓願によって、浄土にまいらしめ、念仏往生の身は、引入せねばおかぬとの、如来大悲の念佛往生の誓願力のお力、如来大悲の誓願力によって、「引入」せしめられるのである。

本願念佛の境へ、如来浄土へと

ここで、紀さんの今回の手紙の最後に

書いてある、「引く」「招引」とある聖

人のお言葉が、聖人、御体感のお言葉として

「浄土文類聚鈔」に

「聖・権の化益、偏へに一切の凡愚

を利せんがために、広大の心行、唯、逆

謗闡提を引かんと欲してなり」と

とあるという。

あった、あった。

今、見えぬ目ながら、明治書院、聖典

の41ページを見るに

「宗師、往還大悲の廻向を顕示して、

オンゴンに他利・利他の深義を利せんが

為に、広大の心行、唯逆悪、闡提を引か

んと欲してなり。」

一度、拝読したのか丁度このところに

傍線が引いてあるが、それは、特に「引

かんと欲してなり」

に心ひかれてではない。その時は。

さらに、紀さん曰く、

といわれ、「引く」とのお言葉、あるいは「悲引」とのお言葉、招引(行巻)もあり、「引く」ということばを有難く思っています。「大般涅槃に至らしめたもうー」(唯信鈔文意)

「名号を称えんものを極楽へむかえん」ということは、名号を称えるものをすぐここに悟らせるということではなく、光明世界にかならず、「招き引く」すなわち「つれていってやる」「導いてやる」とのお約束。丁度親が、め

くらの子の手をひいて(引いて)下さって、わが家につれて帰って下さるごとく、親の導きの手が念佛といた

れま

とあり、まことにまことに「引く」のお

言葉ありがたく、お念佛はまことに、そ

の浄土引入、無量光明土、大涅槃界への

「引入」「悲引」の、親の導きの「お手」

でありま

名号には「きつと必ず汝の心を世話

し、ひきつけて光明世界へ引きつれて

いつてやる」のお約束がかかっている

このことではないかと思われま

とあるが、それが即ち

乃至十念 若不生者 不取正覚

の如来法蔵さまの御誓いでありま

う。

お約束がかかっているとのことにな

いかと思われま

どころではなくて、

乃至十念 若不生者 不取正覚

が、如来のイノチをかけたお約束、御誓

願であり、これなくしては、如来は如来

たり得ないことでありま

(続く)